みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

アイヌ工芸の200年：その歴史概観

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 玲子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009331

アイヌ工芸の200年
――その歴史概観

齋藤玲子※

※さいとう　れいこ
アイヌ民族をはじめ、カナダやアラスカなど北方の先住民族の文化と歴史について研究。特に物質文化について、衣食住などの生活用具とその素材に関心がある。また、工芸品の商品化や観光に着目し、先住民の文化変容や非先住民社会との関係の歴史を明らかにしたいと考えている。おもな著作は『極北と森林の記憶　イヌイットと北西海岸インディアンの版画』（共編 2010 年）、「北海道アイヌの歴史」「たべる」『千島・樺太・北海道　アイヌのくらし　―ドイツコレクションを中心に―』（2011 年）など。

1．はじめに

本研究会「先住民族アート・プロジェクト」が目指すものは、アイヌ民族の造形（アート）の将来的発展に対する学問的貢献でした。筆者はアイヌの工芸の歴史についてこれまでもいくつか発表してきましたが、それは現在の状況を長い歴史をふまえて把握するためであり、将来を考える際の材料とするためです。工芸品を作る人たちは、民族としての歴史や個人の経験などを大切にしながら、現在の活動を続けています。過去と現在を比べ、その盛衰に憂慮したり、旧来の型を打破しようとしたり、新しい流れに自ら漕ぎ出そうとしていると感じています。本稿は、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（編）『アイヌからのメッセージ 2007　―現在から未来へ―』（平成 19 年度アイヌ工芸品展図録）所収の「アイヌ工芸の過去と現在　200 年のメッセージ」を若干修正したもので、近世から平成の現在に至るまでの工芸の変遷の概観です［齋藤 2007］。観光の発達や変化という背景も考慮しながら、時代は昭和期を厚く、また地域としては旭川を例にアイヌの工芸の歴史を振り返ったものです。これまでの論考等との重複が避けられない部分もありますが、ご容赦いただければ、幸いです。

2．近世の工芸　蝦夷土産

アイヌの工芸が独特で精緻なものであったことは、江戸時代の文献から読み取ることができます。元来、アイヌは自分たちの生活で使うために物を作ってきましたが、その器物には文様を彫りこみ、手間のかかる織物や編物を作り、細やかな刺しゅうを施していました。それが、ある時期から和人のために、ことに贈与・交換用あるいは売り物としての工芸品を製作するようになりました。

このことを示す記述は、18 世紀に現れてきます。筆者は以前、最初に幕府が蝦夷地を直轄するようになる 19 世紀の初期から、幕府の役人や探険家等の蝦夷地への来訪が増え、そうした人びと向けの「蝦夷みやげ」としてアイヌの工芸品の需要が高まったと想定しました。また、アイヌに関する記録も多く著されるようになったため、工芸品に関する情報が増え、同時に需要を生む要因となった可能性があると考えていました［齋藤 1994］。しかし、近年の研究によれば、もっと早い時期からアイヌが作る細工物は、江戸をはじめとする都市の知識人たちに知れわたっていたことが明らかになってきています［佐々木 2000；山本 2000

など]。

近世前期には、アイヌからの交易品として、海産物、毛皮、鷲羽のほか、大陸産の錦やガラス玉があげられるものの、アイヌ自製の工芸品はほとんど含まれていません。中世までの蝦夷地は「交易の地」でしたが、幕藩権力によって17世紀末時点を以てその活動を制限され、18世紀後半には「商品生産の場」へとその経済状況が変化した結果、アイヌは交易で入手していた和産物を場所での労賃のかたちで入手せざるを得なくなりました。このような歴史的状況の下で、工芸品が生産されたという指摘は重要です［海保 1985］。

具体的に、和人のために作られた木彫について書かれた記録をみていくと、平秩東作の『東遊記』(1783) や松浦武四郎の『近世蝦夷人物誌』(1858) などには、刃物一本で盆、匙、茶托、手拭掛、糸巻などの精巧な彫物をしあげるアイヌの技術の高さや、見本をつかわして希望の物を彫らせていたことが書かれています。また、兒玉紀成の『蝦夷日記』(1808) や村尾元長『あいぬ風俗略志』(1892) などには、山越内・沙流・厚岸・斜里など細工物を入手できる地名や献上品を納めた場所も示されています［齋藤 1994；大塚 1996 ］。また、択捉のシタエホリをはじめ、現存する作品とともに細工の上手な者としてよく知られる人物もいました［伊藤 1996；秋野 1998］。

一例をあげれば、谷元旦が寛政11(1799)年の旅で著した『蝦夷蓋開日記』には、7月の勇払滞留中に薬草写生の謝礼として松前付添役人から、「夷人細工」の筆管とマキリ鞘を贈られています。その2か月 あまり前には、登別で昼休みをとった家の主が「蝦夷の細工人にて勝手よく…」と、富裕者であったことを記しています［谷 2002］。

このように工芸品を専門に作る人もいたようですが、場所請負人に雇用されていない人や冬季間の「自分稼」の一つとして、女性はアットゥシをはじめとする織物や編物を作り、男性は狩猟で得た獣皮や細工物を米などの内地商品に変えていました。なお、アイヌが主体的におこなった活動として、近年、自分稼に関する研究は注目されています［谷本 2003］。

織物や編物は漁労等の必需品として取引されていたことが知られています。オヒョウ（ニレ科の樹木）の内皮を糸にして織るアットゥシは、その堅牢さ、防寒・防水性などから、船乗りや漁労関係者に愛用されたようです。しかし、アットゥシの緻密さや製法の珍しさ等について言及した記述も少なくはないものの、工芸品としてみなされていたかどうかは疑問です。莚（キナ／ガマ製の敷物）やシナ縄（シナノキ樹皮から作られた荷縄）など梱包材として利用されたものと同等に近い扱いであったと考えられます。本田優子は、幕末に多量のアットゥシが交易されていたことを明らかにし、明治以降も同9（1876）年から14年までは全道

で10,000反を超える量が産出され、和人を含む漁業者が労働衣として着用していた可能性を提示しました［本田 2002、2003］。多く産出しているのは、胆振、十勝、釧路など特定の地域であるにせよ、アイヌの女性がこれらの生産に相当の労力を費やしていたことは、他の仕事ひいては文化全般にも影響を及ぼしたものと推測されています［本田 2002、2003；児島 2003］。

3．明治期のアイヌ細工

明治期には、勧農政策で居住地の移転と土地利用制限、サケ漁・シカ猟の規制など生業活動の転換を余儀なくされるとともに、言語・風俗の同化政策のために伝統的な文化は大きく変化しました。物質文化にしても本州産物や工業製品の移入が増え、日常生活に使われる自製品は数量・質ともに衰退せざるを得ませんでした。

一方で授産策として、とくに冬の農閑期の副業の一つとして工芸が奨励されていたことを示す事例があります。また、児童らの教育においても、「実業科」で女子には裁縫や蓆編みを、男子は夏期に農業、冬期は「手工」として彫刻をさせるとの規程が掲げられていました［小川 1997］。授業で作った製品の一部は販売もされたようですが、実態については不明な点が多く、今後の研究が待たれます。

当時の新しい動きとしては、博覧会への出品があげられます。明治6（1873）年のウィーン万博などのために作られたアイヌの工芸品類は、後に東京国立博物館に収蔵されました［佐々木 1995］。『明治八、九年開拓史公文録』には「細工巧者土人雇入ニ付伺」として博覧会用の品を作らせるため平賀村（現・日高町）のイモンパウクを雇用する伺いが収録されています。イモンパウクについては後述の大正期の博覧会にも出品、以降もその作品が陳列されていた可能性が指摘されています［山田 2000］。

国内の需要のみならず、明治期には欧米の人類学者等が博覧会の準備や研究のためにアイヌの民族資料を収集し、本国へ持ち帰っています。これらは小谷凱宣らの調査により大要が把握されています［小谷 2001］。当時、生活の変容からか積極的に購入の要望を受け入れる場合もあれば、一方で儀礼具などを売り渋る様子も記録されています。

一例をあげると、明治11（1878）年の旅行で『日本奥地紀行』を著したイザベラ・バードは、平取に滞在中、工芸品の売買に関して、次のように書いています。宿泊料を受け取らないため「手工品」を買って援助したいと思ったものの、物をくれようとはするが、買いたいというと手放したくないといいます。しかし、再度やってきて、提示した額の半分の値打ちしかないといい、「弓と三本の毒矢、菱

形模様をつけて葦草を赤く染めた二枚の葦草製の蓆、鞘のついた小刀、樹皮製の衣服」を1ドル10セントで売ってもらいました。生きている人間の酒箸を手放すのは「彼らのならわし」ではないとの理由で、酒箸は売ってもらえなかったのですが、後日亡くなった人のものを贈られています。このほか、男たちは狩猟と魚とりが彼らの仕事であるとし、「室内のレクリエーション」として彼らは煙草入れや小刀の鞘、酒箸や機の梭(ひ(ママ))を彫って作る。」とも記述し、蓆やアットゥシを売ることについても触れています［バード2000］。

明治の前期は、北海道への移住促進、外国人顧問団の招聘、勧業振興策等に付随して、行政当局が観光的取組みを始める時代です。明治14（1881）年には時の天皇が北海道を旅行し、白老で熊送り儀礼やアイヌの舞踊を視察しました。熊送り儀礼は形式的なものでしたが、その後も皇族の来訪があり、アイヌの集落として白老が有名になる引き金となりました。明治後半には日本の各地に鉄道が敷設され、旅行がうながされるようになりました。また当時の文献から、「アイヌ細工」ということばは、明治末頃までに北海道への視察旅行などの増加とともに定着したものと想定できます。近世よりもさらに多くの文書や写真、実物資料が国内外に残される明治期の工芸については、今後の調査研究の進展により新たな様相が明らかになるものと期待しています。

4．大正～戦前

日本で観光旅行が一般化してくるのは、第一次世界大戦（1914-18）後と考えられています。旅行ができたのは一部の富裕者や役人・学者に限られたでしょうが、旅行雑誌が発刊され、旅の情報が全国的に流通し始める時代です。旭川の豊栄小学校では大正6（1917）年に、白老コタンでは1919年から来訪者が急増していることなどから、このころ観光が定着したと仮定されています［小川1997］。鉄道沿線案内や北海道年鑑等の文献からも、旭川近文と白老のアイヌ集落が、観光できる場所として周知されていることは確かです［齋藤2001］。
また、限られた事例ではあるものの、授産策として工芸品の奨励も行われていました。北海道庁の『旧土人に関する調査』（1918）には、旭川区（当時）は大正4（1915）年来、男性による独特の彫刻を施した盆、箸、手拭掛、匙、洋杖、羽織掛等の木工品、女性による刺繍を施した卓子掛、座布団表、信玄袋及び蒲製莫蓙等の製品を買い上げ、材料の供給を行ない、産額の増加を図りつつあると記されています［北海道庁内務部1998］。

明治期に引き続き、博覧会では工芸品が紹介されました。大正7（1918）年に札幌の中島公園を主会場に開催された「開道五十年記念北海道博覧会」に「拓殖教育衛生館」という陳列館が設けられました。閉幕後も「拓殖館」（後に「北海

道拓殖館」）という名で残され、そこにはアイヌの生活用具や儀礼具、そして工芸品がありました。400点近いこれらの民族資料は現在北海道開拓記念館に収蔵されており、目録や研究報告が出されています。同博覧会にはアイヌ細工や絵葉書といった「みやげ」売店があったことも、写真から知ることができます［山田2000；出利葉 2001］。また、北原次郎太は、アイヌが文様を施すには下絵や見本様のものに頼らず直接自由に彫刻していく、とされていたこれまでの「通説」に対し、「旧拓殖館資料」の中の大型の盆を例に、区画割やエスキース（縮小版の試し描き）を利用した可能性を示しており、興味深いものです［北原 2003］。

図1「えもんぱ」（＝イモンパウク）作の盆。
『旧拓殖館所蔵民族資料コレクション資料目録』
（北海道開拓記念館一括資料目録第37集）より

大正後期には国立公園制定が始動し、昭和9（1934）から11（1936）年の間に全国に12の公園が指定されました。そして、昭和12（1937）年には東京の伊勢丹デパートで『観光の北海道展覧会』が開催されました。東京鉄道局・日本旅行協会・札幌鉄道局・北海道庁が主催して、国立公園となった大雪山と阿寒を中心に紹介したもので、残された写真帳からは、熊彫りの実演や、白老の宮本エカシマトクの講演などが行われていたことがわかります。

後述の旭川の歴史で触れるように、大正末期に始まった木彫り熊は昭和10（1935）年ころまでに急成長をとげ、北海道の名物となっていました。昭和12（1937）年の『北海道工業試験場時報』「木彫羆とアイヌ細工について」では、同15（1940）年に札幌で開催が予定されていた冬季オリンピックを見込み、技術向上と実用品のアイディアが示されました［坪田 1937］。戦争によりオリンピックが中止になったため、この成果は活かされませんでしたが、後の輸出商品やみやげ品製作につながるものと考えられます。伝統的な生活用具を発展させたアイヌ細工から、全く新たな工芸品が生み出されるようになった時代といえます。

また、日本民藝協會 の『工藝』106・107号（昭和16・17年）ではアイヌ文

化の特集が組まれ、その美が称えられました［日本民藝協會 1941-42］。アイヌの工芸が民芸運動に取り込まれたことは、戦後の復活や販路拡大に結びついた可能性もあります。

5．旭川の工芸品の歴史

ここで、旭川における工芸の歴史の概略を紹介しておきます。早くからアイヌが商品としての工芸品製作に携わり、木彫り熊発祥の地の一つとして、また工芸発展のための取り組みを先進的に行ってきた旭川は、今の工芸家たちにも少なからぬ影響を与えた地です。近年は詳細な研究も発表されています［相川 1994；川上ほか 2000；金倉 2006］。

明治 31（1898）年に旭川まで鉄道が開通、翌年第七師団が札幌より移転することが決まり、同 33（1900）年から部隊の配属が始まりました。和人の増加に伴って土産品の需要も高まり、生活用具やアイヌの文様を彫った雑貨品（盆、杖、手拭掛、糸巻、ムックリ、花瓶敷きアットゥシなど）を副業として作る者が近文に出てきました。それらの品を扱う山田集珍堂が開店したのが明治 33 年、続いて同 36（1903）年には神崎商店が開業しました。神崎商店については創業初期の写真が残されており、多数の盆や衣文掛などが並ぶ店の様子を知ることができます［旭川市史編纂委員会 1959；相川 1995］。明治 45（1912）年に発行された『北海道鉄道沿線案内』には、近文駅・旭川駅の名物として「旭豆」と「アイヌ細工」の二つがあげられています［北海道鉄道管理局 1912］。

図 2　神崎商店（明治 42 年の撮影とされる）

工芸品ではありませんが、明治の末頃には絵葉書も登場してきます。これが「名物」としてのアイヌの宣伝に一役買っていたことは、確かでしょう。肖像権などの問題がありますが、事情を知る人の高齢化が進んでいることから、絵葉書については近いうちに、研究が進むことを期待します。

大正時代には、上述したようにアイヌの救済策の一つとして、行政による工芸品の買い上げや材料の供給が行われていました。

大正末期、八雲の徳川農場で熊の木彫り製作が始まったのに数年遅れて、旭川でも近文に住むアイヌの松井梅太郎が熊を彫り始めました。昭和5（1930）年頃には、佐々木豊栄堂の店頭で実演販売も行われるようになり、阿寒等への出稼ぎも始まるようになります。わずか10年足らずの間に、木彫り熊は旭川を中心に道内の各地に広がっていきました［相川 1995；川上ほか 2000；金倉 2006］。昭和10（1935）年9月24日から、札幌で北海道庁主催の「北海道アイヌ手工芸品展覧会」が開催されました。松井梅太郎が木彫り熊で名誉賞を、杉村テキシランがアットゥシ織で一等賞を受賞しています。出品者約80名の一覧を見ると、旭川をはじめ各地で後にアイヌ文化伝承者として知られる人びとの名が連なっています。点数は約500点、5日間の入場者は10,000人という盛況で、販売も行われました［社団法人北海道社会事業協会 1935］。

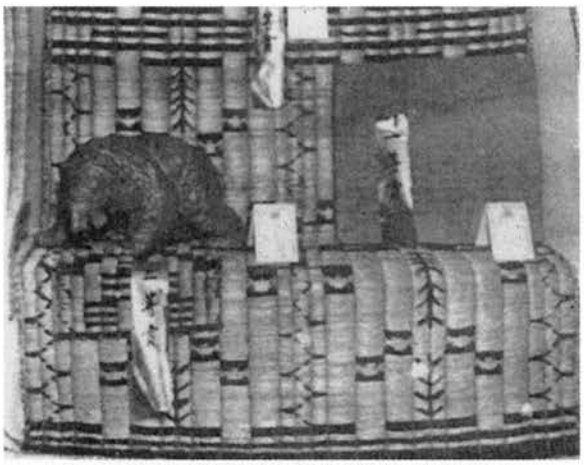

図3　アイヌ手工芸品展覧会『北海道旧土人概況』より

同年12月、道庁社会課の「肝煎り」で共有財産から約3,000円の資金貸出を行い、「旭川アイヌ手工芸品組合」が設立されました。組合員の製作品委託販売、指導講習会等の開催等を柱に10ヵ年計画とされ、組合長は川村カ子トでした［社団法人北海道社会事業協会 1936］。

翌年、陸軍北海道大演習が行なわれ、松井の作品等が天皇に献上されました。昭和13（1938）年にはアイヌ民芸協会が設立され、旭川市出身で東京芸術大学の彫刻家・加藤顕清が名誉会長となり、技術向上のための講習会も開かれました。戦時中は当然のことながら観光客が減少し、木彫をしていた男性たちも兵役につきました。そのようななか、旭川では戦中もデパートで木彫りが売られていたといいます［平塚 2000］。

戦後まもなく、北海道民芸協会旭川支部やアイヌ民芸協団をはじめ、各種の工

芸に関する団体ができ、民芸運動の影響を受けながら、展開していきます。また、米軍進駐司令官の要請もあり、米軍デザイナーの指導を受けて木工芸品製作は再び活発となり、輸出向け製品も作られるようになります。国内向けは置物・装飾品が中心でしたが、アメリカ向けには実用品が好まれ、熊のついたブックエンドやブロッター（インク吸い取りスタンプ）などが開発され、生産されました［旭川市史編纂委員会 1959］[1)]。

旭川で民芸品の製作販売の推進役となったのが、五十嵐広三（後に旭川市長や内閣官房長官も務めた人物、1926-）です。昭和 28（1953）年に五十嵐広三商店として発足、翌 29（1954）年に企業組合・ほっかい民芸舎となり、市から資金の貸付を受けて通年一定価格で製品を買い上げるようになりました［五十嵐 1970］[2)]。加入しているアイヌ 30 名では足らず、1 ～ 5 月までの最盛期には 200 人からの和人を動員して家内工業として生産し、全道はもちろん本州方面にも出荷したと記されています。30 年代初頭、アットゥシ織りによる土産品（テーブルセンター、ハンドバッグその他）が中心で全製品の 60%、木彫り熊類は 20%、コケシその他の人形の類が 15% となっています［旭川市史編纂委員会 1959］。昭和 34（1959）年には旭川民芸土産品研究会が設立され、前年から開催されていた旭川民芸土産品展示即売会を引き継ぐとともに、37（1962）年からは旭川木彫コンクールを実施するほか、後述する他のコンクール・展覧会への出品や、研修旅行等を積極的に行い、製品の向上と後継者育成に努めました［旭川民芸土産品研究会 1978 など］。

また、昭和 34 年には北海道木彫工芸研究会が設立（事務局は道立工業試験場内）され、その主な事業は木材の乾燥技術の指導、デザインの向上改善、新デザインの開発、新作展の開催などでした。会員（約 60 名）の 9 割は旭川と札幌の在住者でした［平塚 1988］。

戦後しばらくの間は、観光地のみやげ物店も冬はほとんど閉められ、夏の間だけ旭川などから職人が出稼ぎに行って、熊彫りなどの実演を行う状態でした。次第に出稼ぎ職人を定住させ、冬の間に民芸品をストックするようになり、地元生産が定着すると、職人（製造者）も店舗を持って小売をするようになりました。阿寒をはじめ、各観光地の小売店主には旭川出身者が少なくありません［平塚 1988］。

6．戦後～北海道観光ブーム

もう一度、北海道全体の動きに戻って見ていきます。戦後復興のため、観光は官公庁の支援等を得ていち早く取組みが始まりました。各地に観光協会や観光連盟が設立され、道路整備がすすみ、バス路線も拡充されました。旅行雑誌での北

1) 杉村満　談。

2) 年代は文献により相違。

海道特集が増え、ガイドブックや観光客向けの小冊子も多数発行されました。阿寒湖のまりも祭が札幌の雪まつりと同じ昭和25（1950）年に始まるなど、観光と関わりの深い行事も現れてくるようになります。

昭和30年代から40年代にかけて、北海道観光ブームと呼ばれる時代がありました。このときに生産された民芸品は膨大で、多くのアイヌも携わっており、現在の工芸家たちは自身や父母などが何らかの形でこの時代の影響を受けているといってよいでしょう。木彫り製品、特に熊は「作れば売れる」時代であり、土産物を扱う業者は製品の確保・安定供給に奔走しました。業界の連携が図られ、コンクールなどをとおして技術の向上や新作の開発などに力が注がれました。熊の次には人形が流行り、次第にアイヌの文様（模したものも含む）の入った小物やアクセサリーが人気を博すようになりました。

アットゥシ織りは昭和30（1955）年に近づくころ、復活されました。アットゥシの生産は明治後期〜大正期には激減していったと考えられ、児玉マリがアイヌの衣類の調査を本格的に始めた昭和29（1954）年頃、平取町の二風谷を除いては織る人は殆どなく、その二風谷でも織り方を知るのは4、5人のお年寄りだけだったようです。同地の貝澤はぎ（1912年生まれ）の話として、「アツシの織り方を教えたのは、もう20年以上前ですね。…中略…　二風谷もそのころは、アツシを織る人が少なかった。私も戦時中はゴザばかりだったね」とあります［上田　1977：130-141］。土産品の開発に取り組んでいた旭川の北海民芸舎では、二風谷で作られたアットゥシを買い上げ、ハンドバッグなどの土産品に加工しました。売れ行きは好調で、二風谷と旭川では多くの女性が内職として織り作業に携わりました［貝沢 1983；萱野 1987；萱野 1993］。

観光ブームが続くなか、昭和30年代後半から、二風谷をはじめ阿寒や旭川など各地に生活館や共同作業所の開設が相次ぎました。ここでは、木彫の講習会などが開かれ、技術の習得と製品づくりが集中的に行われました。この時期、多種のみやげ品は開発されていましたが、多数生産することが求められており、ごく一部を除いては、個人が独創的な作品作りをする環境ではなかったと言えるでしょう。

7．ブームの後に　模索から自主的表現の時代へ

昭和40年代の半ばから50年代に入るころ、観光における差別やアイヌ文化について誤解を招く行為が糾弾されるようになります［社団法人北海道ウタリ協会 1977］。そして、アイヌ文化を伝えるために、アイヌ自らが文化について解説・表現するための場を増やしていきます。

工芸に関しては、「無関係なものをアイヌ民芸品と銘打ったり」した問題の改

善等から伝統的な物づくりの見直しがなされる一方、販売不振から脱却するための新たな工芸品づくりへの取組みも始まっていきます。

公的な施策としては、ブームも落ち着きを見せる昭和49（1974）年、平取で初めての機動職業訓練が行われました。これは北海道立高等技術専門学院の職業訓練に位置づけられ、アイヌの居住者が多い地区で冬季の約3ヶ月、技術講習を行うものです。同町では木材工芸科に始まり、57（1982）年に織布科、60（1985）年から石材加工科が増やされ、毎年約30人が受講しています［二風谷観光振興組合 1998］。日高管内のほか、開始時期や科目は異なりますが、胆振や旭川、釧路などでも開講されています。札幌では昭和55（1980）年に初めて刺繍の機動訓練が行なわれ、その背景には「行事のある度に民族衣服を借りに歩く」のではなく、自分の手で作りたいという理由がありました［社団法人 北海道ウタリ協会 1981］。機動訓練を契機に工芸に取り組む人もおり、後に講師となる人も出ています。

木彫りは、それを職業として若いころから始める人が多数です。対して、織物・編物や刺繍は兼業者が多くいます。女性では子育てが一段落してから取り組み始めたという人も少なくなく、機動訓練や各種の講習会は、そのきっかけともなっています。裾野の広がりは、新たな工芸家を育て、市場性にとらわれない作品も生み出すことになったといえます。

アイヌ文化全般に関しては、昭和59（1984）年に伝統芸能として舞踊が重要無形民俗文化財に指定されました。昭和の終わりから平成に入るころ、（財）アイヌ民族博物館（白老）をはじめ、旭川市博物館や平取町立アイヌ文化博物館、萱野茂二風谷アイヌ資料館などでは体制も新たに、若手のアイヌが学芸員や運営者の一員として博物館活動を担うようになりました。それら以外の道内外の多くの博物館においても、アイヌ資料の見直しやアイヌ文化に関する学習会等が増えてきます。（社）北海道ウタリ協会（当時）では工芸者技術者研修の内容を刷新し、平成11（1999）年から国立民族学博物館の外来研究員として工芸家たちを受け入れるよう打診しました。同館は要請に応え、調査研究の支援を続けていますが、それは同時に国立民族学博物館にとっても資料活用につながっています。

1993年の国際先住民年には、アイヌ文化、特に工芸に関する展示会等も多数催され、新聞等のマスメディアでも各種の特集が組まれました。そして、平成9（1997）年にアイヌ文化振興法が施行され、平成に入ってからの二十年余りの間にアイヌ文化の周知度は飛躍的に増したように思われます。

8．工芸展・コンクールの役割

ひととおり工芸に関する流れを概観したところで、現代の作品につながる工芸展

について振り返ってみます。旭川の章で記したように、古くは昭和10（1935）年にアイヌ工芸品展が開催されました。コンクールや工芸品展は、技術の向上、新しい作品づくりなど作り手に影響を与えるとともに、普及にも一役買っているということができます。コンクールには出品しないという工芸家もいますが、一般的に作者にとって受賞は励みであり、受賞者の店には賞状が飾られていることも少なくありません。以下に、アイヌの工芸に関するものをいくつか紹介します。昭和35（1960）年に北海道木彫工芸研究会と北海道木彫工芸協同組合の共催、北海道商工会議所連合会の後援により「第1回北海道観光民芸品展示即売会」が札幌で開催されました。これにはアイヌ以外の工芸家や企業からの出品も含まれていますが、開始後しばらくは旭川勢の活躍が目立ちました。昭和40（1965）年からは社団法人北海道貿易物産振興会が主催団体となり、翌年の第7回からは「北海道観光民芸品展」と名称が変更になりました。46（1971）年 度の第12回からは「北海道秀作民芸品展」、28回目からは「秀作民芸品コンクール」と名称を変え、平成元（1989）年の第30回まで開催されました。この間をとおして、熊とアイヌをモチーフとした作品は主流でした［社団法人 北海道貿易物産振興会 1990］。

北海道ウタリ協会主催で昭和39（1964）年度に始まった「北海道アイヌ民芸品コンクール」は、道内のウタリ協会会員から募集した工芸品のコンクールです。昭和54～56（1979～81）年度は一時中断して現地講習会等に変わりましたが、再開して、平成8（1996）年2月の開催から、回数は受け継いで名称は変更し「第29回北海道アイヌ伝統工芸展」となりました。昭和40年代からいく度かの部門分けの試行があり、58（1983）年度からは「伝統工芸」と「一般工芸（民芸）」の二部門に分かれ、現在に至っています。審査は、伝統部門では伝統性、技術性、芸術性を、一般部門では芸術性、技術性、市場性に視点をおいています。

図4　札幌機動訓練作品展（北海道ウタリ協会「先駆者の集い」27号・1981）

同協会では、平成8（1996）年から同展（コンクール）で上位入賞を3回果たした人を優秀工芸師と認定し、作者および作品を展示会等で紹介、アイヌ文化の理解と新たな販路拡張、後継者の育成に努める、としています。2011年現在13名の優秀工芸師がいます［社団法人 北海道ウタリ協会 1994など］。

このほか阿寒では昭和50（1975）年から「阿寒クラフト民工芸展」がはじまり、下って平成9（1997）年度からは財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構でも「アイヌ工芸作品コンテスト」を毎年開催し、2011年で15回に達しました。また、同財団では個展やグループ展開催のための助成も行なっており、アイヌの工芸が展示される機会は格段に増えています。

9．おわりに

ここまで見てきたとおり、政策や世相によりアイヌ民族のおかれた状況は変化し、経済活動の一つである工芸品の製作は、当然のことながら市場の動向と無縁ではありませんでした。工芸についてはまだ総合的な調査研究の域に達していませんが、これを含むアイヌ文化研究は、今日進展しつつあります。

1990年代以降、それまでの史観を脱した近世史の見直しや、公文書や新聞記事等を含む近現代史料の掘り起こしなどが盛んになってきています。若手や在野の研究者のひろがりとともにアイヌ自身により、これまでとは違った視点からの、そして詳細な調査研究が進められています。工芸についても新たな知見が得られる可能性が高いでしょう。

研究の成果は公開され、展示や普及事業に活かされ、アイヌ文化への理解・関心が深まり、アイヌ文化の担い手たちに還元されていくことと思います。博物館や美術館等の収集を含め、工芸品の市場がひろがれば、多様なニーズも出てきます。そうしたなかで、工芸が今後も変化を続けていくのは自然なことです。

しかし、素材の持つ力を引き出そう（持つ力に導かれる）とする姿勢や、使う人（や見守るカムイ）に気に入られるよう造形や装飾にこだわり、心をこめて丁寧につくるという精神は、変わらずに受け継がれるものと思います。そして、古い物に触れることは、新しいものづくりへの力の源となるでしょう。

一方、現在複製されている民具は、かつて生活用具として使われていた物の持つ迫力に欠けるとの指摘があります［野本ほか 2003］。このことは、真摯に受け止めるべきものと考えます。実用される物をつくることによって品物は洗練され、人の心に迫る力は満ちてくると考えます。多くの人の手で使われることは、アイヌ工芸の真価を鍛えこそすれ、価値を失うとは思いません。将来的に、アイヌの工芸品がより多くの人に愛用されるようになることを期待しています。

紙幅の都合上および筆者の力量からも限られた事例を紹介するに留まり、文献についても絞り込んでいます。引用文献の多くは、筆者の1994年の論文［齋藤1994］に収めています。抜刷が若干部ございますので、ご関心のある方は、ご連絡ください。

調査研究の上で、そして現在伝えられているアイヌの文化を知るうえでの教示をくださった、多くの方々にお礼を申し上げます。文中、敬称を略したことをご容赦願います。

＜参照文献＞

相川延介

1994～「北海道観光土産品小史考（改訂）　民工芸品編・木彫熊」『観光みやげHokkaido』89～、北海道観光土産品協会。

秋野茂樹

1998　「細工物としてのアイヌの工芸　シタエーパレの生きた時代に」『アイヌの美――彫る　清野謙次コレクションを中心に』、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（編）、pp. 34-35、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。

旭川市史編纂委員会

1959　『旭川市史第一巻』旭川市。

旭川民芸土産品研究会

1978　『創立20周年記念誌』。

五十嵐広三

1970　『市民運動の証言――ドキュメント旭川』鶴書房。

伊藤　務

1996　「エトロフの名工、シタエホリ幻のマキリについて」『標茶町郷土館報告』9、pp. 1-20。

上田満男

1977　「語る人　児玉マリ」『わたしの北海道――アイヌ・開拓史』、上田満男（編）、pp. 130-141、すずさわ書店。

大塚和義

1996　「アイヌにおける観光の役割――同化政策と観光政策の相克」『観光の二〇世紀』、石森修三（編）、pp. 1-122、ドメス出版。

2003　「アイヌ工芸、その歴史的道程」『アイヌからのメッセージ――ものづくりと心』、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（編）、pp. 128-135、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。

小川正人

1997　『近代アイヌ教育制度史研究』北海道大学図書刊行会。

貝沢　正（編）

1983　『二風谷』二風谷自治会。

海保嶺夫

1985 「蝦夷地の交易」『目の眼』104、pp. 25-29。

金倉義慧

2006『旭川・アイヌ民族の近現代史』高文研。

萱野 茂

1987 『アイヌの里 二風谷に生きて』北海道新聞社。

萱野志朗

1993 「アイヌ民族の伝承的技術」『北海道の緒職――諸職関係民俗文化財調査報告書』北海道教育委員会。

川上 哲ほか

2000 『北海道の木工芸の起源と現状と未来――木彫り熊のルーツを追って』財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。

北原次郎太

2003 「『旧拓殖館資料』の観察所見」『旧拓殖館所蔵民族資料コレクション資料目録』(北海道開拓記念館一括資料目録第37集)、北海道開拓記念館(編)、pp. 118-128、北海道開拓記念館。

児島恭子

2003 「アイヌ女性の生活」『蝦夷島と北方世界』、菊池勇夫(編)、pp. 167-198、吉川弘文館。

小谷凱宣

2001 「研究活動とアイヌ研究の課題および既発表主要論考一覧」『在外アイヌ関係資料にもとづくアイヌ文化の再構築』、小谷凱宣(編)、pp. i-xiv、南山大学人類学研究所。

齋藤玲子

1994 「北方民族文化における観光人類学的視点(1)――江戸～大正期におけるアイヌの場合」『北海道立北方民族博物館研究紀要』3、pp. 139-160。

2001 「北海道観光案内のなかのアイヌ文化紹介の変遷」『他者像としてのアイヌ民族イメージを検証する(昭和女子大学国際文化研究所紀要)』6、pp. 29-42。

2007 「アイヌ工芸の過去と現在 200年のメッセージ」『アイヌからのメッセージ2007――現在から未来へ』、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構(編)、pp. 90-95、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。

佐々木利和

2000 「歴史と文化――日本史にいう近世のころ」『馬場・児玉コレクションに見る北の民アイヌの世界』、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構(編)、p.10、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。

1995 『アイヌの工芸』日本の美術354、至文堂。

社団法人北海道ウタリ協会

1994 『アイヌ史 北海道アイヌ協会北海道ウタリ協会活動史編』(機関紙「先駆者の集い」収録)、北海道出版企画センター。

社団法人北海道社会事業協会

1935 『北海道社会事業』42。

1936 『北海道社会事業』49。

社団法人北海道貿易物産振興会
1990　『25周年記念誌』。
谷元　旦
2002　「蝦夷蓋開日記」『近世紀行文集成　第一巻』、板坂耀子（編）、pp. 163-293、葦書房。
谷本晃久
2003　「アイヌの『自分稼』」『蝦夷島と北方世界』、菊池勇夫（編）、pp. 199-231、吉川弘文館。
坪田博治
1937　「木彫熊とアイヌ細工に就て」『北海道工業試験場時報』第5年11、12号、pp. 1-36。
出利葉浩司
2001　「博物館が語るアイヌの生活用具」『白い国の詩』534、pp. 4-13。
二風谷観光振興組合伝統工芸体験学習部会
1998　『アイヌ伝統工芸振興のための課題と方策に関する共同研究』。
日本民藝協會
1941　『工藝』106。
1942　『工藝』107。
野本正博、貝澤真紀ほか
2003　「伝統をきりひらき未来をつむぐアイヌ工芸」『月刊みんぱく』27（12）、pp. 2-9。
バード、イザベラ
2000　『日本奥地紀行』平凡社ライブラリー、高梨健吉訳、平凡社。
平塚賢智
1988　「審議会の20年に想う」『総合年鑑　昭和42年度～62年度』北海道工芸意匠考案保護審議会。
2000　「平塚賢智氏（旭川／木彫り熊・源流展講演）」『北海道の木工芸の起源と現状と未来――木彫り熊のルーツを追って』、川上哲ほか（編）、pp. 2-10、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。
北海道庁内務部
1998　「旧土人に関する調査」『アイヌ民族近代の記録』、小川正人、山田伸一（編）、pp. 485-580、草風館。
北海道鉄道管理局
1912　『北海道鉄道沿線案内』。
本田優子
2002　「近世北海道におけるアットゥシの産物化と流通」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』8、pp. 1-40。
2003　「近代北海道におけるアットゥシ産出の様相を解明するための予備的考察――開拓使の統計資料の整理と分析を中心に」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』9、pp. 35-79。
山田伸一
2000　「拓殖館のアイヌ民族資料についての覚書」『北海道開拓記念館研究紀要』28、pp. 179-198。

山本智宏
2000 「近世アイヌと広島——菅茶山と小島雪晴」『馬場・児玉コレクションに見る　北の民　アイヌの世界』、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（編）、pp. 116-120、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。